

二次元ぷち文庫

AINE

剥がれゆく男装の仮面

089タロー

表紙イラスト：あかめ

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『AINE ーアインー 剥がれゆく男装の仮面 前編』
『AINE ーアインー 剥がれゆく男装の仮面 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



アイネ
AINE

剥がれゆく男装の仮面

089 タロー

表紙 / あかめ

登場人物紹介

Characters

アイン

王国の正義を守る女性騎士団『茨の槍』に唯一男として所属する少年。
正義感が強く、剣の腕も立つ。

「い、いやです、放してくださいっ！」

「うるせえ！ テメエはこれから売られるんだ、文句は金返さねえ親父に言いな」

松明が灯った洞窟然とした部屋の中。若い女の悲痛な悲鳴と野太い男の残忍な罵声が響き渡った。

どう見ても地下であるここには陽の光が漏れ入ることもない。そんな中を、街娘風の少女数名が半裸の男らに引つ張られていく。男らの腰には剣帯が吊られ、いかにも野盗といった風貌だ。

ここは盗賊ギルド。闇の世界の住人が集まる根城だった。

彼らは法の網をかいくぐって汚い仕事を行う。そして今、違法な高利貸しによる借金のカタに、貧しい娘たちを人買いに売り払おうとしている。

「ふふん、今回の稼ぎはまあまあだな。バカがみみっちい金欲しさにつられてくれてラッキーだったぜ」

ボサボサの髪の若い男が、泣き喚く少女の一人を捕まえ酒臭い笑みを近づけて笑った。彼の身なりは他の盗賊よりわずかだがマシである。彼、グレンはこの次代の頭、つまり若頭だった。

「くくく、そこそこの上玉だ。どれ、売っぱらう前にちよいと味見してやるかな。下手にマクつきだと買い手を選ぶしな」

「い、いやあ、帰して、帰りたいいいっ」

少女の懇願など無視してグレンは粗末な衣装を引き裂くと、貧しいゆえ下着もない乳房にネロリと赤い舌を這わせた。

「ひいついやあ！」

「へへ、また始まったぜ。若頭のいつものクセが」

部下の盗賊らも様子を眺めて、ただ下品に笑うのみ。

そう。国家間が争い、騎士が、貴族が、自国より自身を愛する時代では、こういった所業でさえ容易く黙認される。なぜなら、こういった集団と結託すれば、闇社会での甘い汁をも吸い上げることができからだ。

愚かなことだが、彼ら盗賊ギルドは事実上、国にも存在を認められていた。それくらい、この時代の王権社会は腐敗していたと言える。

しかし——いつの世も闇があるように、いつの世にも光は存在していた。

「頭、若頭、大変でさあ、騎士の役人どもが——！」

突然、一人の部下が血相を変えて飛び込んできた。

「ああん？ どうしたってんだ、せつかくこれから一発——って、な、なんだっ!？」

——ドオオッ！ バキイッ！

部下が来た入り口のドアが派手な音を立てて吹き飛んだ。安物の木戸は木片になって埃

臭い部屋をいっそう酷いものにした。

「大人しくしろ賊ども！ 我らは国立騎士団『茨の槍』である。お前たちの所業はすでに確認済みだ。よって速やかに拘束する！」

砕かれた入り口に現れたのは、剣を片手にした長身の女だった。

スラリと伸びた直剣は両刃。襟の立ったロングコートには茨を模った騎士団の紋章。スマートなロングブーツに動きやすいストレートパンツと、どこか男装の麗人といった出で立ちである。

男たちは一目で悟った。彼女らは国の法である騎士団だった。それも『茨の槍』といえ、多くが女性なことで有名な部隊だった。

しかし、なぜ良好な関係だったはずの国の騎士団が？ —— 誰もが疑問を持つ中、時間の空隙を埋めるように女の背後から騎士たちが雪崩れこんできた。

「じよ、冗談だろ!! なんで今さら手入れなんざつ？」

「ぐううっ!! く、くそ、てめえらの稼ぎだつて手伝つてやつたろうがっ」

完全に油断していた盗賊たちは、泡を食ったように曲刀を手にして応戦態勢に入る。とはいえ盗賊の剣技が騎士を上回るはずもなく、女だてらの刃の前に次々と斬り伏せられていった。

一方で若頭は、剣では無理だと早々に悟ってボウガンを掴むと矢をつがえる。

「くそつ、いきなり攻めてきやがって！ こいつならどうだ！」

いくら騎士でも鎧もなしでは飛び道具を防げるものではない。そう息巻いてトリガーを叩くグレン。

だが——キイイイン！

「なにっ!？」

彼の放った短矢は一人の騎士の眼前で甲高い音と共に真つ二つになった。

「アイン！ 助かったわ」

「お任せを。この程度の軌道、見切ってみせる！」

立ちはだかったその者は、団長と思しき長身の女騎士を庇うように進み出た。しかも女が多い『茨の槍』だが、どうやら男——というより少年のようだった。

青みがかかった短い髪のも、どこか中性的な印象の少年だった。アーモンド型の赤い瞳は凛々しさと美しさが同居しており、男にしては妙に睫毛にも艶がある。唇は薄いが不思議と鮮やかな薄桃色で、頬の輪郭もふつくらと柔らかそう。

背も男にしてはやや低く、全体的にほっそりしている。胸板も薄く手足もしなやかで、他の騎士みたく乳房が膨らんでいれば女と見間違える容姿だ。グレンの初見では、「男色家には高く売れそうだ」というところ。襟の高いロングコートも、裕福な貴族の美少年が演劇に臨むかのようなだった。

例えるなら、男臭さが皆無な少年が女の前でナイト気取りという印象。男臭い盗賊らからは失笑さえ漏れそうなもの。けれど彼の視線は不敵で、闘争心に溢れていた。

「覚悟しろ盗賊ども。もうボクらは闇の支配など受けない。これからの国は正義の名の下の統治に臨む！」

「ほざけ坊主が！」

再度矢をつがえて放つグレン。鏃は風切り音と共に彼、アインを穿つかに見えたが、
「甘い！」

——キイン！ 再び矢は宙で切り裂かれ虚しく地面に転げ落ちた。

それを見たグレンは慌てて次矢を放とうと——して、鼻先に迫った切っ先を見た。

「うおおっ!! あ、あぶねえっ！」

仰け反って避けたのは、実は単に偶然だった。相手が速すぎるため危機感さえもが追いついていない。

グレンの本能が死を予期したのは、少年騎士の青い髪がパッと目の前に広がった時だった。

「終わりだ盗賊！」

「う？ おおっ？」

信じられない。矢を装填する間もなく一瞬で接近されている。そう理解した時には、す

でにアインは腹に刺突を放つ寸前だった。

若頭が死ぬ——誰もがそう思い血飛沫が舞うのを予想した。

実際、横からの一撃がなければ確実にそうなっていただろう。速度に取り残されたグレンは、強烈な殴打をアインが避けたため救われた。

「ちっ！ 新手か？」

「小僧が。ワシの息子を殺ろうなんざ十年はええ」

親父！ と喝采をあげるグレン。窮地を救ったのはギルドの頭、グレンの父親だった。

その父を見て、すぐにグレンは驚愕する。すでに年老いて引退間近な父は、しかし信じられないほど筋骨隆々な身体を暗い室内に晒していたのだ。

「お、親父、そ、それは、まさか？」

「闇の市場を舐めるなよ小僧。裏の世界にやこういう代物もあるんだ」

丸太のような腕を黒々と照らすその姿。無論、それが生来のものではないことをグレンはよく知っていた。

これは、言わば秘蔵の薬の効果だった。麻薬の類で、盗賊よりもさらに闇、暗殺者たちが開発した恐るべき劇薬である。極度の消耗を引き換えに、一時的に凄まじい筋力を得られるものだった。

不退転の覚悟の老頭は、巨木となった剛腕を振るう。

「死ね、小僧ども！」

「アイン、離れて、ここはわたしたちが——あぐうっ!？」

異常を察した仲間の女性らが少年を庇って前に出る。が、拳を剣で受けた途端、紙吹雪のように吹っ飛ばされた。

「このっ、違法な薬物など使って！ 恥を知りなさい下郎——がはあっ！」

「ぐはは！ 所詮騎士といったところで女子供の集団よ。歴史ある盗賊ギルドを舐めるでないわ」

さらに新手をなぎ払って巨漢となった頭が笑う。ここまでしたからには敵を全滅させる意気込みだろう。

「サイアさん、ルイさん！ くっ、よくも！」

「小僧、お前も死ね！」

剣を振り上げ突っ込む少年に頭の剛腕が唸って迫る。直撃すれば頭蓋を粉碎しかねない拳。だがアインは風のように脇を潜り抜け、敵の脇腹に刃を滑らせていた。

「ふん、効かんわ！ 鋼の筋肉、舐めるでないわ」

だが逆三角形となった上体は、鋼の刃さえ弾いてみせた。まさに鎧を思わせる異常な筋力だった。

これにはアインも驚かされてチッ、と小さく舌打ちする。対して頭は獣のような笑みを

浮かべてなおも剛拳を振り回していく。

「くっ、なんの、この程度っ！」

「ふはは効かん効かん！ 逃げてばかりじゃあワシは死なんぞ」

アインの剣捌きは見事なものだった。長い長剣をバトンのように軽やかに回し襲い来る拳を鮮やかにいなす。

しかし時折放つ斬撃は虚しく筋肉に弾かれる。緊張感に精神もすり減り、青い前髪の下
の額にはいくつもの水玉が浮き始めていた。

そんな応酬がしばし続き。やがて両者は距離を取ると、眼光鋭く睨み合った。

「おのれ、ちよこまかと悪あがきしておつて。次で終わらせてやる」

「はあ、はあ、同感だ。ボクも、次で決めるっ」

全身に力を溜めて防御も許さぬ一撃で臨む頭。迎え撃つアインは剣を下段に構えて身を
低く、切り上げの体勢。

いつの間にか、周りの騎士も盗賊も水を打ったように静まり返っている。呼吸すら聞こ
えそうな無言の対峙。行く末を左右する剣と拳。この一撃こそ勝敗を分けると誰もが悟つ
てじっと見守った。

そして。張り詰めた戦の空気に——篝火がパチリと亀裂を入れた。

瞬間、

「死ねい小ぞおとおつ！」

「はあああああつ！」

雄叫びをあげて両者は踏み出し蹴られた砂がパツと散った。

どちらも早く、もう互いの間合い——かと思われたが、一步手前でアインの剣が振り上げられる。

それは明らかに失策で頭の手前で空振りに終わる。誰もがそう思った途端、跳ね上がった土煙の中から折れた鍬やじりが飛び出した！

「くっ？ 小癩な！」

鍬はグレンが放ち斬り捨てられたもの。地面に落ちていたそれを、アインは切っ先で投擲したのだ。

鍬は頭の目に向かい、すんでのところまで打ち払われる。が、頭の方こそ失策だった。腕を払ったためかえって顔はガラ空きになったのだ。

そこに——鍛えられない急所である口に、アインの長剣の刺突が飛び込む！

「てえええええいつ!!」

「し、しまつ——!! がおとおおつ!!」

——ズバアアアツツツ!

切っ先が喉を抉って後頭部から突き抜けた。アインの狙いは始めからこれだったのだ。

「お、親父いいいいっ！ く、くそ、てめえら、よくもっ……!!」

固唾を飲んで見守っていた若頭は悲痛な面持ちで父を見送った。無論、彼らに同情の余地などないが、口蓋を串刺しにされた無残な家族の死体を見れば誰だって叫びたくなるだろう。

怒りに我を失いそうなグレンを、すんでのところで声が止める。

「わ、若頭、ともかく逃げましょうや！ このままじゃマジで皆殺しつす！」

部下に言われて見渡してみれば、確かにほとんどの手下が斬られ、または拘束されている。最後の切り札も破れた以上、残っているも全滅は必至だった。

「く、くそ、くそくそくそおおっ！ 覚えてろ、てめえらみんな、ガンガンに犯してマ○コガバガバにしてやるからなっつ！」

「待て！ 逃がすものか！」

下卑た捨てゼリフを残すグレンを息巻いて追いかける剣士アイン。

だが、地下に作られた盗賊のアジトは元は鍾乳洞だったもの。末端に行くほど迷路のように入り組んでいて、慣れた者でなければ追跡は困難だった。

「よっしゃ！ 若頭、どうにか振り切れそうですぜ！」

「けど若頭、これからどうするんですかい？ ここをやられちゃ、もう手出しできやせんよ」

小走りに迷路を逃げながら手下たちは洗面を作る。誰もが憤懣ふんまんやるかたなく報復を望ま
ずにいれないが、奇襲はあまりにも痛手となっていた。

もつとも、プライドも家族をも碎かれたグレンは、このまま引き下がる気など毛頭な
った。

「……なあに、やりようはあるさ。ヤツらは闇社会つてもんの根深さを知らねえ。剣や弓
じゃどうにもならねえ搦め手つてやつをな」

長い長い迷路を半日以上も走っただろうか。やつと陽の光が見えてきた頃には、すでに
グレンの頭の中では報復のプランが固まりつつあった。闇社会で培った姑息な知恵が、こ
こにきて生きていた。

「ふふん、お上がいくら吼えたところで、闇の旨味を知っちまった連中は簡単にや消えね
え。アマちゃんな騎士どもはその辺が分かっちゃいねえはずさ」

陽の光を浴びたグレンの頬には、憎悪を塗りつぶす狡猾な笑みが刻まれていた……。

——国立騎士団『茨の槍』隊、長年闇社会を牛耳ってきた盗賊ギルドを討つ！

この事件は、世間でも大々的に報じられた。

今まで盗賊ギルドは公然の秘密だった。子供でも知っている国の裏側の象徴だったのだ。
それが突如、国による法の手が伸びたことは、街の者たちにも驚きと当惑を与えていた。

持ちよおく、ブチ抜いたんだろ？ ええ？ このちっこいタマでなあ——って、ああん？」

「あうっ！ く、さ、触るなっ……！」

グレンとしては、腹いせにまずは男の急所を潰してやろうとしただけ。他意はない。だ
というのに、股間に伸ばした手は、『ソレ』を掴むことができなかった。

さすがに怪訝になり、グレンはゴソゴソとそこを探る。だがやはり特徴的な異物はなく、
ただ滑らかな肉の丸みがあるのみ。

するとグレンは、目を丸めて首を押さえつけたアインを見やった。

「テメエ、まさか？」

「!! ち、ちがっ、ボクは……ああつ、ナイフをっ!!」

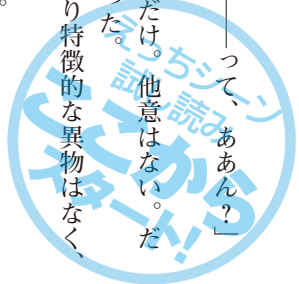
何かに気づかれ焦るアイン、その平らな胸元に若頭の刃物が妖しく迫る。

そして、剣呑な刃が襟立ちのコート、その閉じられた前を滑り——ザクッ！ と生地
を引き裂いた！

「ああっ！ や、やめろ、中は見るなああつ！」

おいおい、と驚きのため息を漏らすグレン。悲鳴をあげる『彼』の胸は、今、前部が開
かれインナーが露出している。そのインナー姿は、どう見ても『彼』とは言えないものだ
つたのだ。

「こいつあ驚いた。テメエ、色男かと思ってたが……女じゃねえか」



そう。確かに胸は平らだったが、それは巻かれたサラシのためだった。きつく巻かれた布が膨らみを押さえ、女騎士であることを隠していたのだ。だが暴いてみれば、谷間の部分にはちゃんと乳房が寄せられていて、膨らんだ乳房の存在を確かに物語っていた。

しかも男が手を忍ばせると、コートの中には意外にも見事なくびれがあつた。先のシャイラよりもなお細い、蜂のようにキュッと搾られた細く悩ましい乙女のくびれが。

「あつ、くそつ！ さ、触る、なつ！」

「あ、アイネ、やめて！ その子には何もしないでっ」

「アイネ？ お前、本当はアイネって名前なのか？ ハハ、こいつあマジだな。外からじや見えねえが色っぽい腰つきしてやがるし、肌もツルツルで女そのものじゃねえか」

シャイラが思わず本名を口にし、聞きつけたグレンがなおも『彼女』のくびれを撫でる。彼の言うように、アインの肌は白くきめ細やかで触り心地も素晴らしい。

おまけに下へ手を滑らせば、くびれとは真逆のぷつくりと丸く膨らむヒップもしつかりと感じ取られていた。

「うあつく、くそ、お、お尻、を……」

（くそつ、し、知られてしまった。ボクが、女だつてことを……）

アイン——いやアイネは、我知らず赤面して悔しげに歯噛みした。

そう。彼女は確かに女、いや少女だった。騎士の家に生まれたアイネは跡継ぎになれな

いと父に嘆かれ、物心ついた頃には女ではなく男の『アイン』として生きることを強く義務付けられたのだ。

以来、剣の道を学びつつ騎士を目指し、理想に燃える『茨の槍』への入団を許されるに至った。下手に男がいなくても詮索を避けるに実に幸運だったといえた。

それが今、こうして女であることを下劣な盗賊に知られてしまった。それがどうにも悔しくて、恥ずかしくて、殺意さえ込めて睨みつけるアイン。

だが、相手が女だと知ったグレンは明らかに態度を変えていた。

「ククク、こりああいい。ムカつく騎士さまをまた一人楽しめるってもんだ。どおれ、隠れたおっぱいはどうなってるかなあ？」

面白そうに笑う男は男装少女を捕えたまま、ゆっくりとナイフを胸に当てる。刃先をちやうど頂点に当てるとツプツプとつついておどけてみせた。

「うっ！ うるさい、女だからってどうだっというんだっ」

「ああ？ 女つてのはなあ、ここもでつかくて色っぽいもんなだよっ」

男の肘が顎に当てられアインはただ壁に押し付けられたまま。そんな彼女を嘲笑うように、反らされた胸、そこに巻かれた白いサラシに刃物がゆっくりと侵入してくる。これがまた、ナメクジを思わせる異様な動きで、きつく閉じられた胸の隙間をツリリと微細に擦ってくる。

(あつ、いや……冷たいのが、む、胸に……!)

尖った先端は剣呑そのもの。けれど下から丁寧になじ込まれると、布の一枚一枚が徐々に内側から持ち上げられて、辱められる女の予感が胸に冷たい熱を与えた。

しかも、刃物が中でそつと回ると刃先が外側に向けられていく。薄布がプチプチと斬られていって、裂けた中央から白い下乳がゆつくりと、むつちりと、柔らかかに零れ出ていく。(だ、だめつ、サラシが切れて……見られる——!)

予感が乙女の理性を焼いて恐慌にも似た焦りが生まれる。腿が閉じられて女の怯えを浮き彫りにする。が、それさえも楽しむように刃はグツと持ち上げられて。

——ビリッビリビリッ! つつぷるん! ぷるるるたぶふんっ!

「ああつ、アイネ……おのれ貴様らあ、彼女を放せえつ!」

「ヒュウ! こいつあすげえ、とんだ大盛りだ!」

憎い若頭の歓声と共に、ついにアイネの、女然とした二つの膨らみがサラシの中から暴かれてしまっていた。

しかも。グレンの歓喜も領けるほどに、現れた乳房は圧巻のサイズだった。拘束を解かれた二つの房は、弾けるように外に飛び出て嬉しそうにぷるぷる揺れまくっている。その大きさと肉感、女慣れしたグレンでさえ目を瞠るものだった。

「すげえな。貧乳でも隠してんのかと思いきや、めちやくちや巨乳じゃねえか。色も白く

てぶるっぶるだし、乳首だつていい感じにピンクじゃねえか」

無知なアイネは知らぬことだが、彼女の乳房は本当に大きくてゆうにGカップはあるといふもの。鍛錬の成果か垂れもせず、若さゆえに矯正なしでも美しい丸みを完全に保っていた。

これで乳首も初心なピンクでは男心をくすぐらずにはいられない。さすがのグレンも殺意を忘れて、鼻先でじつつくりと目で舐め回した。

「や、やめろお、そんな、近くでえ、つつ！」

（は、鼻息、かかっている。目も、すぐくギラギラしてつ）

まるで白磁のような、丸く美しいGカップバスト。チェリーのように可憐な、小さく愛らしい桃色乳首。これらが二つ、目の前で柔らかに揺れていれば男を興奮させないわけがない。けれどアイネは女の生を知らないためか、単純に恥ずかしいという感覚しかなかった。

しかし、耳元で囁く男の言葉が不思議と鋭く鼓動を揺すった。

「女のクセに騎士気取りつてな、随分と肩が凝ったんじゃねえか？ それも男のフリなんざして。あいつらみてえに素直に女やつてりゃいいもんをよお」

「だ、黙れっ！ 女、女つて、そればかり！」

「当然だろうが。いい女見りゃあ男つてのは触りたくなんだよ」

「えっ？ い、いい、おん……？」

不意の男の何気ないセリフに不思議と食いついてしまうアイネ。乳房に頬を寄せるグレンと反射的に視線を合わせてしまっていた。

「なに驚いた顔しやがる？ ああそうか、ガキだからその辺は分からねえってか」

「うっ……うるさいっ！ ボクは女を捨てたんだ。女である前に騎士なんだっ」

睨みつけて目を逸らすアイネだが微かに頬に熱を覚えていた。なぜか、なぜか先ほどの言葉が気になり心の奥底を軽く引つかかれた心地だった。

しかし、その意味に気づくより先にグレンの両手が動いていた。

「ク、ハハハ。そうかい。じゃあ、テメエが女だっことをたっぷりと教えてやるよ」

「っえ？ な、なにを言っ……う、うああっ！」

——もみりゅっ、むにゆるりりっ。

彼女が何かを言う前に、男のゴツイ指たちが十本、白い乳肉に伸ばされてきて思いきりわし掴みにされていた。途端にアイネは驚いてしまって声を上擦らせて身震いしていた。

「うあ、な、なんのマネだっ？ どうしてむ、胸なんてっ」

「なんのマネだあ？ 男ってな、女の乳は触りたくなくて当然だろが。ヒヒ、にしてもすげえ乳だ、デカくてエロすぎるぜ」

「なっ？ く、くそ、変態めえっ——んっ！」

横暴な男のいやらしい乳揉みに少女の潔癖さが傷つけられる。逃げようとする彼女の脇

をしつかり挿んで固定すると、タップリと広がった巨乳の横肉を真ん中に寄せてタップリと揺らす。

恥辱感を高められてアイネは目尻を吊り上げて睨む。だが、普段隠された彼女の乳肉は素晴らしい柔らかさで男の指をモッチリと包み込んでいた。

「へへ、この巨乳、マジで気持ちいいぜ。見ろよ、どんどん柔らかくなって指に吸い付いてくるぞ！」

「うあつ、だ、だまれっ！　こんな、破廉恥なマネえ……ううっ！」

女性特有の柔な乳脂肪は揉まれるたびに形を変えて、男の手の上でぷるるん、と美しい波紋を浮かべる。Gカップ巨乳はグレンの手にも余るもので、そっと下から持ち上げられると柔肉が零れ落ちそうになる。

しかし男は、指の間から溢れる乳肉も回すようにして感触を楽しんだ。その、スリリと滑る指の感触がまた奇妙に刺激的で、アイネの乳房は少し熱を上げられてしまった。

（な、なに？　こんな、玩具みたいにされてるのに、胸が、すぐく気になってきてっ）

今まで感じたことのない熱感にアイネの心は小波を覚える。どうしてだか、持ち上げられた乳房が揺れると神経がそこに集中してきて男の体熱をますます感じる。それは微細で、どこかもどかしく、くすぐったさの奥に奇妙な痺れがあるみたいだった。

「あつ、あつく、あ、汗、塗って……このっつ」

(汗、ヌルヌルする。は、肌が、滑るみたいに、ああ……)

普通なら絶対に嫌悪しか湧かない汗。なのに今、乳房が初めて異性に触れられ恥じらいの微熱が募る中、微かなヌメリは不思議なほど肌を感じやすくする。

「つつ！ はあ、こ、こいつ、いい加減にいっ！」

このままでは、男の感触をもっと受け止めることになる。この時は、ただそれが嫌で、アイネは苛立ちのまま身体を揺する。

しかし、逃れようとする姿と、拍子にぶるりん、と躍る先端が、また何とも色っぽくて男の劣情を意図せず楽しませていた。

「ひゅう。可愛い乳首揺らしちまって、いやらしいヤツだぜ。そこも弄って欲しいのか？ いいぜえ、んじや、美味そうな先っぽ、いただきっ」

「えっ?! い、いや、やめ——んんんっ!!」

——ちゅううっ、ちゅぷるっ！

男の唇が乳首を含み、巨乳少女は驚きの悲鳴をあげていた。

呆れたことに、グレンは揺れる小粒を乳児のように吸ってみせたのだ。アイネにしてみればまったく理解し難いことで、見てくれだけなら滑稽だと思っただけなほど。

なのに……。

「あつくうう！ い、いやっ、このっ、あ、あふんっ！ は、放……っっ！」

（な、なに、これっ？ 乳首吸われると、ぞ、ゾクってする……）

睨もうと眉根に力を込めつつアイネは内心困惑していた。なぜだか、男のヌメった唇が触れると先端にピリッ、と刺激が走る。それは鋭く、胸の芯にまで響きそうだが、どこか甘やかな名残もあつて、痺れと残滓の反復感が不思議と快く思えてしまうのだ。

おまけにグレンは、どこか丁寧な手つきに変えて乳肉を下から揉み込んでくる。持ち上げても持ち上げてもぷるん、と零れる大きな乳房を、しかしタツプリと、しつこいくらいに優しく弄る。そして、上向きになった薄桜色をこれ見よがしに近づけてくると、ピクリと震える可憐な小粒を実に美味そうに吸引するのだ。

「むちゅっ、じゅるるるっ。んゝ、美味しい乳首だ。ミルクみてえな味しやがる。こりや遊んでねえな、本物の生娘の味と色だ」

「うあんっ!! はあ、はあ、や、やめろお、んくう!! そ、そんな、何度も、吸ってえ……っ！」

いやらしく笑む男の顔は相も変わらず汚らわしい。けれど口内はジツトリと熱く、不可解な恥熱が乳房に滲み込まされるかのよう。唾液も滴るほど塗されてしまつて、吸われる先端がヌラヌラと卑猥に濡れていく。

これがまた恥辱感をより高めて必死に拒もうとするのだが。不思議なことに、白い乳肌はみるみる感度を上げていつて、ジンジンとしたどこか——快い熱を持つていく。恥じら

いと痺れとがない交ぜになった、たとえようもないような刺激的な熱感。

（ど、どうして？　なんだか胸、おかしく……それに、へ、へんな声、出ちゃう……！）
悔しいのも事実だったが、アイネは何よりも自身の変化に戸惑っていた。

自分が女なのは言われずとも分かっている。例え認めたくなくともだ。しかし、男として生きてきたアイネは男女どちらの猥談にも加われず、性的な知識が極度に疎かった。

そのため、オシヤレなどには心惹かれても異性との繋がりを理解していなかった。この行為が何なのかを理解していなかった。

そんな初心な——自慰さえ知らぬ処女の性感が雄の刺激に出会ってしまえば、ただ困惑するのも無理はない。しかも、うっすらと色づき始めた魅惑のGカップは、本当は感度が良く、雄の唇の執拗なキスにプツクリと乳首を勃起させてしまうのだ。

「んじゅるっ、ふう。ヒヒ、どうした、そんなに腰くねらせちまってる？　気持ちいいんだろ？」

「はあ、はあ、な、なにっ？　だ、誰が！　そんな、気持ち、いいだなどと……！」

「嘘つくなよ。分かるぜえ、すっげえ乳してんのに敏感なんだな。見ろよ、乳首ピンピンになってやがる。おっぱいもスケベそうに揺れまくってるぜ」

グレンに言われてふと目をやれば、確かに先端が普段より尖って妙に破廉恥に見えてくる。乳房は今でも触られているものの、乱れてきた呼吸に合わせて自分から柔らかかに揺れる。

動いているようだった。

（こ、こんなっ？　こんな恥ずかしい胸、は、初めて見たっ。握られてるのに、左右にぶるん、ぶるん、つて……）

アイネはただただ狼狽する。まるで他人の胸を見ているようだった。こんな、男に弄られて破廉恥に揺らめき口づけに反応するようなものなど、自分の胸だとは思えなかった。

「くっ……う、うるさい！　お前の勝手な思い込みなんて、ボクには関係ないっ」

一瞬怯みはしたものの、アイネは慌てて理性をたぐり寄せ闘志を宿した眼差しを向ける。そうとも、このような淫戯など拷問と思えば大した苦でもないはず。己に言い聞かせ歯を軋らせる美少女騎士。

しかし。彼女自身が知らぬところで身体は徐々に目覚め始めていた。その証拠に、男の指が素早く忍び込みズボンの内側、隠れた下着に触れた時には、ひんやりとした冷たい湿気を感じてしまった。

「んあっ!?　や、やめっ、ず、ズボン、中にい……？」

「逃げんなよ、お前が女だつてこと教えてやるつて言つたらう？　それに気持ちよくないんなら、その証拠がここにやあるんだ」

無骨な指は手慣れた動きで、不意打ちに驚く美少女の腰を逃がさない。むしろスルリと恥部まで滑り込み、薄いインナーに守られた肉土手を指先でチュルリと擦りあげてみせる。

——スリッ、チュクッ……!!

「んああっ!! ひあ、そこをつ!!」

「どうした、ちゃあんと濡れてるぞ? 感じてないなら、どうして濡れてんだ、ああん?」

「うぐう、ああっ! なあ、なにを言つて、このつ……くふうんっ!」

腕を縛られた恥辱少女は背後から抱き締めるように襲われていく。対抗しようと頭突きを試みたが、一瞬早くズボンの内側、隠れた柔肉土手をさらに爪先で擦られた途端、未知の甘電が膣洞を焼いて腰がびくん! と跳ねてしまっていた。

（ああつ、なんだこれっ!?! む、胸の時より、もつと凄いつ。く、クセになりそうなヘンな感触が、股に、ビリって……）

不可解なことに、ちようど尿孔付近を擦られると腰の奥にまで甘電が届く。まるで腰が浮つくような、ふわつとなつて消え入りそうな、ジンジンとあと残りする疼きにも似た甘い痺れが。

その正体が分からないため焦りに近い感情を持つアイネ。すると、そんな焦燥を見抜いた盗賊はズボンの前をますますまさぐり、湿気に満ちた土手の割れ目をインナー越しにプツシュしてきた。

「んきやうっ!! ひ、ひあ、お、押すなあ……!!」

「やめて! その子は何も知らないの、手荒な真似は……はうう!!」

仲間もこちらを見て必死に庇おうとしてくれる。自身もまた股を開かされ生の陰部を弄られてもだ。

なのに、そんな氣遣いの声でさえ腰をますます敏感にさせる。浮つくような奇妙な痺れは股を突き抜けて奥に届き、男装騎士の乙女の象徴、無垢すぎる子宮をも甘やかに沸騰させてみせた。

（い、いやだ、いやあつ、みんな見てるのに、ボク、女の子みたいな声出しちゃつてえ……！）

声だけではない。アーモンド形の強気な眼差しも今は揺らいで女らしいし、両足も女々しく内股になって恥辱に耐える女そのものになっている。あまりの恥ずかしさに頭がゆだつてしまいそうだった。

「どうだ、濡れてるのが自分でも分かるだろ？ なるほどな、何も知らねえつてこたあ、オナニーだつてしたことねえのか。道理で噛み合わせわけた」

背後から覗き込み、恥部を弄るグレンは得心したとばかりに笑った。彼からすれば、よもや自慰さえ知らぬほど初心だとは予想外だったというところだ。

けれどアイネには反論する余裕もない。ズボンに手をつつまれた腰が、初の性感にビクッ、ビクッ、と震え始めている。耐性がないのが完全に仇になっていた。おかげで身体に力が入らず、あまりにも初心な柔肉土手をプニプニと指で押されまくつてしまう。

「んうあああつさあ、触るなああ!! ひ、ひくう? いやあ、し、下着越しに、指いいっ!」

(ま、またこんな声っ! で、でもなにっ? 股をつつかれると、腰の奥、どんどん痺れるウ!?)

失禁などしていないのにじつとりと濡れた下着と陰部。その新鮮な亀裂が指腹で幾度も激しく擦られる。羞恥と困惑が沸点を低めてすぐにも頭がカアツとなった。

(で、でもヘンっ! 背筋もゾクゾクするっ! 腰、動いて、凄く、すぐくっ——!)

凄く——クセになりそう——そこまで脳裏で言いそうになって、しかし赤面し惑うアイネ。

そう、信じ難いことだが、ズボンの中をまさぐられるたび、突き刺すような快い痺れが胸と胎内をドクドクと脈打たせるのだ。嫌悪はまだ残るものの理解できない愉悅に責められ、蜂のような悩ましいくびれもくねくねと卑猥に回ってしまった。

「どうだ、気持ちいいんだろ? 女つてのはな、おっぱいとマ○コをいじくられると汁出して悦んじまうスケベで男好きな生き物なんだ」

「はあはあ、か、感じ……? 気持ちいい……? そ、そんなことっ、んんんっ!!」

——スリリッ、つぶ、ちゅぷりっ……!!

反論しようとしたのも束の間、アイネは堪らず唇を噛んで腰を突き出し震えてしまった。

グレンの指先が亀裂を探り当て、ほんの数ミリだけ中に侵入してきたのだ。途端に甘痺れが強烈になって蜜がドロツと溢れてしまった。

「はあはあ、ど、どうしてえ？ し、したくもないのに、も、漏れちゃうウ……」

ことここに至っても、まだアイネは自身の変化に戸惑うばかり。これが女の快樂と、快樂からなる愛蜜だということを知らないのだ。

そんな、肢体だけ見事な純粹少女に男は含み笑いしながら囁く。

「漏れていいんだぜ？ スケベな女だって認めちまえよ。見ろ、お前のお仲間もあんなに汗出してよがってやがる」

「えっ……」

言われてふと仲間を見やると。確かにそこには、顕な股間を弄り回され濡れに濡れた美女たちがいた。

「はううつあああつ！ やめろお、奥つ、弄らないでええつ！」

「はああんつ！ はあはあ、いやあ、そ、そこつ、弱いのお……堪忍して……いやんつ！」
 （ど、どうなってるんだ？ シャイラさんも、ルイさんも、恥ずかしいところ弄られてるのに、あんなにいやらしい顔して……）

先んじて恥部を晒された騎士たちは、しかし今、グレンの手下らに指で掘られて真つ赤な顔して腰をのたうたせていた。

その姿は、性に無知なアイネでさえ、目を疑うような官能の気配に満ちている。グレンの言うように割れ目はすっかり水気にまみれて何かを感じているようだった。

「分かるだろ？ アイツらもマ○コ嬲られて気持ちいいんだ。だからお前もぜんぜんヘンじゃねえんだよ」

そう嘯くグレンの声には、不思議と抗い難い何かがあった。どこか胸がときめくような、心の壁が溶けるような、恐いのに興味深い何かがある。

そして、差し込まれたゴツイ掌にそのままズボンを下げられていくと、声にもますます可憐さが混じっていく。

「あつ、い、いやあ……」

腰を折りつつ耐え忍ぶ美少女は、すでにズボンを下ろされる手にも抵抗できなくなりつつあった。

「はあ、はあ、あ、くう……み、見る、な……」

「ほおお、さすがにコッチは男モンじゃねえか。カワイらしくパンティちゃんだ」

彼の言うとおり、男装美少女の最後のインナーはシンプルながらも女ものだった。騎士の家らしくシルク製で、純白も眩しい下着である。こればかりは男物ではサイズが合わず、仕方なく使っていたのだ。

だが、今はこれが裏目に出て雄の視線を十分に楽しませていた。薄い生地は面積も少な

「なに言ってるやがる、マ○コとろとろにしやがって。本当は欲しかったんだろう、んん？」
「んああっ!! あ、ああっらめエエ、ま、膜っ、つついちゃ……！」
膣内の熱い肉の感触にアイネは堪らず声をあげる。薄くて柔らかな純潔の証が、卑賤な盗賊の雄性器にノックされてしまっている。

「おおっ、ついに犯すのか!! むぬうグレン、なんといい羨ましいヤツめえっ！」
「我らを差し置いて楽しみおって！ 貴様あ、恩を忘れたか！」

「へいへい、分かってますよお偉方。ちよいと待ってくださいよ、今、済ましちまいますからねえ」

客の嫉妬を軽くないなすと、グレンはアイネの両足を掴んで大きく左右に開いてみせる。そして客席にも見えるように、尻を持ち上げて屈曲させた。

「ひい、いやああ……ま、また、見られてエ……」

「さあお客人！ アンタらはツイてるぜ。ウチのニュースターのロストバージンショーだぜ！」

慄く少女をマンガリ返しにして、上向きのラビアに先端をハメる。官能に緩んだ細い両腕が力なく頭上の床に落ちた。

（だ、だめエエ……そ、それを、されたら……もお、わたしっ……）

本当に女に——セックスを知る本物の女になってしまおう。そんな女が男気取りで騎士を

続けるなど、どうやったらできようか。

だが、膜をくすぐる亀頭の感触に、粘膜は自然と愛液を溢れさせる。

「ククク、ほんとは欲しいんだろ？ 分かるぜえ、マン肉が誘ってやがる。どうだ、女になりたくねえか？ お仲間の騎士どものように、影でこっそりやりまくってる大人の女ってヤツによお？」

（お……女……大人の、女……みんな、みたいな……？）

その言葉は、乙女の心をさらに揺さぶった。

仲間の女騎士たちは、ちゃんと男を知っていた。女であれぬ自分を尻目にして。そう思うと、影を帯びたささやかな嫉妬まで顔を覗かせるようだった。

……本当に、自分はどうなりたいたのか。自分もあの姿に憧れていたのだろうか。そんな感情が胸に灯り、四肢の強張りがかすかに緩む。

その、女としての密かな期待をグレンは見逃さなかった。

「ヒヒ、欲しそうな顔になったなあ。よおし、それじゃ……」

「つつ!!! ひ、ひぎい——あああああッッッ!!!」

——ずぶぶつ、ぶちいいいっつ!

湿った肉音を響かせながら肉棒が大きくラビアを穿つ。

青い髪の剣士少女、その処女膜が盗賊頭に奪われた瞬間だった。

「おおおっ！ つ、ついにやりおった……生本番シヨージャ！」

散々妬んだ貴族どもも、少女の破瓜シーンに興奮を隠せない。金で色を買う連中だ、なかなか生娘にはお目にかかれないのだ。

だが、そんな連中を気にする余裕はない。ガクガクと両足を突っ張りながらアイネは両目を見開いていた。

（そ、そんつ、なあ……ッ！ う、奪われたッ、グレンに、盗賊につ、ボクの……わたしのバージン……ッツ!!）

入り口にあつた存在感が、今、確かな痛みを刻み付けてより深い膣内に侵入している。もはや問うまでもない。自分はこの瞬間、紛れもない『女』にされたのだ。

それは途方もない喪失感で、人生観が瞬時に狂ってしまったかのよう。

けれど、ズブズブと進む雄肉の感触に、アイネは意識を吸い寄せられた。

（ひ、ひィ……！ す、すご、いい……！ こ、こんな、おおきのが奥にい……お、オマ○コのなかつ、すごく、広がってエエエ……！）

パクパクと口を開き、必死に酸素を肺に送る。それは、破瓜の苦しみに耐えようとする仕草そのもの

だが——胎の奥を拡張していく、強烈な異物感と圧迫感。それらが次々と送り込んでくるのは、なぜだかほとんどが焼け付くような快感だった。

(きつ／＼／＼気持ち、いいッ……！　少し痛かったけど、お、奥の方ッ、ずりずりこすれてエエ……！)

処女を失うのは苦痛が伴う。そう聞いてはいたが、不思議と辛さはさほどでもない。日頃の鍛錬を思えば余裕で我慢できるものだった。

それどころか、胎内で脈打つサオの感触はゾクゾクするほど刺激的。緩やかな摩擦が、まるで膣の疼きを癒やしてくれるかのようだった。

「はあはあ、ああこんなア……！　あふんッ！　か、硬いイ……！」

「どうしたあ、もうイキそうなのか？　分かるぜえ、もうマン肉が吸い付いてきやがる。やはりイカセまくったのが効いてるみてえだな」

——そう。確かに処女だったアイネの膣は、しかし羞恥と官能によって十二分に解れきっていたのだ。現に膣肉はトロトロに柔らかく、処女膜も蜜でふやけていたほど。

そして、タツプリと濡れたヒダとツブたちは、鍛えられた素晴らしい締まりで太い男根を楽しませていくのだ。

「ひイッあああああつっ!!　ひあ、やめろお、そんな、速くうごくつつ、んはあああんんツッ!!」

「へへ、すっかりエロ顔になってんじゃねえか。うおお、マ○コも狭いしヒダヒダも細かくて気持ちいいぜえっ……!!」

「い、いやああ、見ないで、顔っ、見ないでええ……!!」

彼の言うとおりに、少女の表情ははつきりと快楽で蕩けていた。瞳はトロンとして涙まで浮かべているし、甘い吐息を零す唇は唾液でルーージュを光らせている。

そんな素顔を見せられてはグレンも燃えずにはいられない。さらに勃起で肉ヒダをかきわけ深い部分をジュブジュブとこすった。

「んうあああああつらめらめえええっ!! ひいひい、奥ウ、すごいのおお、燃えるウ、燃えちやうウウツツ!!」

「くそっ、初めてだつてのにエロい女め! たまんねえ! おら、お客サンにも見てもらおうぜえ!」

「ひいついやああああんっ!!」

ノってきたグレンは止まらなかつた。少女の裸身を担ぎ上げると繋がったままくるりと回し、後ろから抱きかかえるようになる。

そして、乙女の両足、膝裏を持つと、まるで幼子の放尿のように股を開いて客に見せた。「うおおっなんといやらしいっ! も、もう血も汁で見えんっ」

「おのれグレンめええっ! ゆ、許さんぞお、ワシらを尻目にそんな美女の膜をいただくなどおっ」

散々痴態を見せられた挙句、目の前で極上の踊り子と楽しまれるのだ。当然貴族らは嫉

妬に狂って血走った目で二人を見る。

だが同時に、自らの肉棒をますますシゴいてもいた。この時代、オナニーのネタなどはそうそう転がっていないのだ。

「あ、あああいやああ、見てるウ、みんな、わたしのアソコ、エッチしてるトコ、見てるウウ……！」

一方でアイネも、見られる恥ずかしさと勃起刺激で頭がおかしくなってくる。恥辱の興奮と絶え間ない快楽が、子宮の記憶にべったりとこびりついてしまっているのだ。

（あああ、恥ずかしくて頭狂ううッ！ も、燃えるウ、膣とカラダっ、熱くなっちゃううッッ！）

意識が混濁しまともな思考が浮かばない。破廉恥な体勢でこれ見よがしに犯されるのに神経が快楽で染められていく。

「ひい、あひい、か、硬い、のおお……らめ、らめなのにい、ナカ、焼けるウウ……！ み、見られて、焼けちゃうウウ……！」

「クハハどうだ！ てめえは見られて感じるドスケベ女だって分かったろうが！ ち、ちくしよう、こんなにギュウギュウ締めやがって……！」

「う、うるさいい、わたし、ドスケベじゃ……はああああんっ！」

「おっとお、ここかあ？ ここがいいのかよスケベマ○コがあ！」

——ごりっごりりっ！　じゅぶじゅぶぐちゅぐちゅっ！

グレンの腰が加速をかけてアイネの裸身も堪らずよがった。裏筋が急所を探り当ててソコをゴリゴリとこすつたのだ。ただでさえ敏感な膣粘膜が雄々しさと技に魅せられてしまつて、激しい快楽が子宮へ駆け登つてくる。

「らめえっソコおおっ！　ああこするなア！　きつきちやうつ、敏感なトコつ、しっ、痺れっっ!!」

（だめっ、頭、また、真っ白に——！）

もう少しも抵抗できず、アイネはただ尻を跳ね上げられるしかない。穿たれるたび力は抜けて、心地よい淫熱がヒダと子宮口を蕩けさせる。自由な両腕もいつの間にか、背後の男の首に巻きつき抽送を助けてさえいた。

（ああっどうして？　お、犯されてるのに、みんなに見られながらレイプされてるのに、心とカラダ、どんどん……満たされてエ……！）

今や客の視線は犯されるラビアに釘付けだった。黒々とした巨根が出入りし蜜と肉ビラをヌプヌプとかき出す。無毛の肉土手がテラテラ光つて卑猥なほどに柔らかかに歪む。

少女の心が満ちていくたび巨乳もゆさゆさと揺れを速める。尖った薄いピンクの突起も上下に長い楕円を描く。

「お、おおお、あんなに汁を垂らしおって、イキそうな顔しおって……！」

「く、堪らんっ！ 私としたことが、他人のセックスを見て果てるなど……!!」

霞んだ視界の向こう側で、男らが熱狂し自慰をする。その原因は他ならぬ自分。情けなくも犯される自分。だというのに、羞恥心が官能に変わっていく。ただ——見られる愉悅と男根の感触に支配されていく。

「はあっはあっはあっああっ！ だ、だめエ、もお、イク、イク、らめイクうううう……!!」

「ハハハ、イケ！ イっちまえ！ 見られて感じるメス騎士があ！」

知らず知らず股を開き、見られて感じて犯される美少女。その、自らも腰を動かす姿にグレンは勝ち誇った笑みを浮かべる。

そしてセックスを見ていた女らが、少女の股間にそつと唇を近づけてきて。

「くす、イケちゃうのね？ バージンでイケるなんて、ほんと、いやらしいコ……ちゅっ」

「くひィ——ああああイクううううっ!!」

——びくびくびくっ！ ぷしゃあああっ！

堪らずアイネは達していた。はみ出た肉ビラとクリトリスに犯されながらキスされたのだ。快感が幾重にも重なってきて腰が爆ぜてしまったようだった。

脳裏がパツと白く染まって快感以外が分からなくなる。膝がピーンと伸びきり、オシメの姿勢でアクメを魅せる。汗が散り、潮が噴き出て、実に豪快なイクっぷりだった。

と同時に、熱くてヌルヌルで細やかなヒダヒダを、グレンもまたしつかりと楽しみきつていた。

「ぐっ……く、イクぞ、食らえっ！」

——どぎゆるるぶぎゆっ！ どくどくどくどくうううっ！！

情け容赦ない灼熱の塊が、無垢な膣肉を蹂躪していき子宮までドロドロに汚していく。

「んああ、ああああアアア……！！ しゅ、しゅぐ、いイイ……あちゅいの、ナカにイイ……！！」

アイネは白目を剥き、舌を垂らしてよがってしまった。いった直後の中出しの熱さは、また蕩けるような快感があった。

しかもそれだけではない。ステージの真下で見上げる客たちも、自慰で射精してしまつたのだ。

「ぐおおつくそ！ で、出る、出てしまっ！」

「わ、ワシらともあるう者がオナニーなんぞっ！」

妬む彼らの精液が飛び散りアイネのラビアに降りかかる。こびりつく粘液のドロリとした感触が粘膜をさらにわななかせた。

（だ、だめ、エエエ……せええき、気持ちよくなって、頭、おかしくなりそオ……！！）

否——すでにおかしくなっていた。初めて味わう女の時間が、大勢の男に視姦されなが

ら大股を開いて純潔を散らすというもの。あまりの出来事に、誇りも理性もズタズタにされていた。

（わたし、とうとう……女になった……女に、された……戻れない。一度と、男には……）
絶望という名の濃い影が、女になった騎士を覆う。そこへグレンが追い討ちをかける。

「どうだ、女にされた気分は？ ……クク。聞くまでもねえようだなあ。すっかりエロい顔になりやがって」

（つ、それは、お前のせい……）

かすかに残った知性だけが、心中で多少の反論をする。しかしその表情は、絶頂の余韻でウツトリと蕩けて強気な意思などどこにもなかった。

（もう、いい……仲間が、シャイラさんたちが解放されるなら、ボ……わたし、どうなったって……）

男が結合を解きステージ上に降ろしても、ろくな抵抗も示さない。恥辱のレイプに戦意を挫かれた美少女騎士。

それを目撃く見極めると、グレンは精液の滴る勃起を顔の前でチラつかせる。

「ククク、さあ、次はコイツをしゃぶってくれや。できた女ってな、男をイカせた後でちやんと後始末もするもんだ」

「あ、ああ、そんな、こと……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>